

## 平成 31 年度 国文学科推薦入試

### 1 出典

伊藤慎吾編『妖怪・憑依・擬人化の文化史』（笠間書院、2016）による

### 2 出題意図

文章の読解力と古典についての基礎知識、漢字についての基礎的素養を問うとともに、文章読解をもとに、自分の見方・考え方を的確に文章化できるかを問う。

### 3 採点基準

文章を的確に理解しているか、古文・漢文についての基礎的な知識と理解があるか、設問に適切に答えているかが採点の基準となる。小論文については、課題文の内容を物語の教訓性と娯楽性という観点から把握できているか、これまでに学んだ具体的な知識と結びつけて例を挙げているか、自分の主張を論理的に記述できているかを主な採点基準とした。

### 4 採点講評

問一、漢字の読み書きの問題。

イの「かんぱつ」は正答率が 5 割ほどであった。漢字表記として目にすることは少なくとも、耳にする機会があり、意味から想起することもできるはず。また、ウの「機」の正確な書き方もチェックしておいて欲しかった。

問二、助動詞を抜き出し、終止形・活用形・意味を書く問題。

抜き出す助動詞は 3 語であるが、全てを正確に抜き出し、完答できている答案は多くはなかった。「じ」（終止形「じ」・終止形・打消推量）はおおかたの受験生が抜き出せていた。「れ」（終止形「る」・連用形・受身）、「な」（終止形「ぬ」・未然形・完了）については、どちらか一方のみの抜き出しにとどまっている答案が少なくなかった。文法の知識は単なる暗記ものではない。正確な文法の知識があることで古文の細かい意味やニュアンスが把握できる、という体験を重ねながら、しっかりと知識を身につけてほしい。

問三、本文についての 40 字前後の説明問題。

『百喻経』の話が師弟関係をたどったものであることは理解できているが、その前提として蛇の頭と尾がキャラクターとして実体化しているという点を書いていない答案が見られた。

本文全体として、物語における擬人的なキャラクターの登場が娯楽性に、たと

えの働きが教訓性に対応しているのであり、両者を混同せずに理解していることが求められる。

問四、本文について、理由を 40 字以内で説明する問題。

「動物寓話」の本質は「譬喩譚」であることを押さえた上で、その「譬喩譚」の説明としての本文中の「難解な仏教の教義を平易に説くための方便である。」や「話末に評語があるにしろ、ないにしろ、読み手・聴き手を教え導くためのものと考えられてきた。」という文を参考にして答えることが重要である。「譬喩譚」というキーワードを押さえていない答案も見られたが、「教訓を読み取れるように受容されてきた。」という点については、上記の文を押さえてよく書けていた。

問五、(小論文)

「本文の内容をふまえて」とあることから、本文の正確な読み取りがなされた上で、考えるところを述べるべきを、読みの不徹底から、求められる記述の論旨の展開が不十分な答案がやや目立った。本文の内容を的確に把握する読解力、文脈の展開に即して文章全体を理解する思考力が求められる。そして、「物語の教訓性と娯楽性」に関する筆者の主張の中で、考察を加える上で重要だと思われる論点を簡潔にまとめ、段落を改めてから自分の論を展開するなど、構成を工夫して書くことが必要である。

「具体的な例」を挙げて考えるところを述べるのが求められているが、説得力のある適切な例示は必ずしも多くはなかった。「童話」「昔話」などのジャンルを挙げ、一般論に終始している答案や例示に用いた諸作品の理解が不十分なため論述に無理が見られたものも散見された。

具体例をあげて考察を加えた後に、考察とは直接的に関係のないことを書いている答案もあった。小論文における結論は、自分が書いた考察や論証から導きだされた判断や意見のみを書くことが肝要である。「論」として成立する書き方を心がけてほしい。